

平成24年度第1回朝日地域審議会

会議録（概要）

期日：平成24年5月31日（木）

場所：鶴岡市朝日庁舎 大会議室

平成24年度 第1回 朝日地域審議会 会議録

- 日 時 : 平成24年5月31日(木) 9時30分から11時45分まで
- 会 場 : 鶴岡市朝日庁舎4階 大会議室
- 出席委員: 敬称略・五十音順
井上時夫、大滝清策、小野寺一郎、小関祐二、佐藤照子、佐藤宥男、佐藤芳彌、菅原和則、菅原孫一、帯刀春男、難波一之、松本壽太、
- 欠席委員: 敬称略・五十音順
伊藤文一、今野めぐみ、佐藤世津子、佐藤正、難波庄一、難波玉美、宮崎康史
宮崎重美
- 市側出席職員
【庁舎】朝日庁舎支所長、総務企画課長、産業課長、市民福祉課長、総務企画課主幹、南部税務事務室長、南部建設事務室長補佐、総務企画課職員
【本所】企画部長 企画部次長、地域振興専門員

1. 開 会
2. あいさつ

佐藤芳弥会長

鈴木誠次朝日庁舎支所長

3. 協 議 (議長 佐藤芳弥会長)

(1) 平成24年度予算および主な事業の概要について

(2) 地域審議会の提言について

(説明 朝日庁舎総務企画課長・産業課長)

- 佐藤芳弥会長

24年度の予算、基本的な考え方、市全体の中から朝日に関する重要な予算の説明、地域審議会の提言に対する事業計画の方向性と、予算も含めた対応について説明をいただいた。広範囲にわたる説明だったが、委員の方々からはそれぞれの立場で思いをこの提言書のなかに入れたわけなので、それが具体的にどうなっているのかも含めて検証をしながら、ご質問ご意見をいただければと思う。

この提言については12月15日、予算編成も進んでいるなかでの提言で、限られた時間だったが、朝日のいろいろな思いを提言書に含めて市長に伝えた。

基本計画の中には森林文化、膨大な自然を生かしたいろんな取り組みも鶴岡市の基本的な柱にあるわけだが、まずそれを維持していくためには、基本的にそこに人が住んで、人が住むということはそこに

経済がともなって地域のコミュニティが整ってはじめてこの森林文化の基となる自然が生かされている、そういう思いでいろんなところに取り組んでくださいということを伝えながら、提言書の説明書の説明をした。そういったことも含めて何かご質問、ご意見あったらお願いしたい。

○ 帯刀春男委員

この冬の雪の多さに大変苦労したわけだが、除雪体制が民間に委託されるという説明だが、今までの、今年までのやり方と、これから民間に委託されたときにどう変わっていくのか、やはりなんといってもこの地域の最大の悩みで、通勤も含めて道路の確保というのは非常に重要な位置にあると思うが、どう変わるのかということが心配なところなので、もう少し説明をお願いしたい。

○ 渡部喜弘南部建設事務室長補佐

今の質問のとおり、今年度から全面委託する考えだが、基本的には直営でも委託でも除雪の方法についてはこれまでどおりと変わらない考え方だ。具体的なことはこれから業者と話し合いながら進めていきたいと考えている。1回目の話し合いについては、7月頃に設けたいと考えており、その中で話し合いながらよりよい除雪をしていきたい。

○ 帯刀春男委員

自治会長をしているときの思い出すと、業者に言うのではなく行政のほうに苦情なり意見なりを言ってくださいということだったようだが、今後はそういう状況の中で、どういうシステムになるのか。

○ 渡部喜弘南部建設事務室長補佐

除雪に対する様々な要望が出てくるかと思うが、その要望については当然、朝日地域では朝日庁舎で除雪対策本部を設けるので、そのなかで職員が要望を受けてそれに対して応えていくということになる。中には直接業者をお願いするようなことも聞いているが、できるだけこちらのほうで受けて、それに対して応えていく。

○ 帯刀春男委員

要望としては是非、行政が中に入りながら業者への指導をしてもらわないと、どちらかといえば業者は業者の都合で様々なことをするわけなので、業者に丸投げでなく、その辺のフォローをお願いしたい。

高齢者が多い中では業者にも言えないわけだし、行政にも言いにくいという部分もあるので、ぜひ今までどおりの除雪体制というかシステムをとってほしい。

○ 佐藤芳弥会長

今、除雪のいろいろ問題があったので、関連して意見、質問があったらお願いしたい。

雪は帯刀さんからもあったように、この地域にとっては避けては通れない大きな課題で、今までもいろいろ克雪、利雪、遊雪ということで取り組んできたわけだが、この雪を広く捉えながら意見、質問があったら関連して受けたい。

○ 井上時夫委員

通常は投雪した雪をシーズン最後に1回、排雪して終わっていたが、今年は1月の下旬から一杯にな

ってしまって、奥のほうに押し込んで春先に戻して排雪していた。そうすると奥に押していた分を戻さなければならないため、単純に見てこの方法ではかえって経費がかかるのではないかと思い、どうせそこから出すのであれば押しておかないですぐ出したほうが経費がかからないし、今年是一部そうした地区もあるので、ぜひそういう方法でやってもらいたい。いっぱいになって出さなければならない状態で連絡がきたときには、是非見に来てそこの代表者と話をしてもらいたい。

○ 鈴木誠次朝日庁舎支所長

除雪にかかわる建設の関係は、私の直接の指揮命令系統ではなくなった。本所の建設部だが地域の課題ということで、帯刀さんと井上さんから話があり、特に井上さんの場合は除雪のオペレータとしてやっているの具体的な手法までご存知で、おそらくどのくらい雪が積もって捨てなければ分からないのでそうしたと思うが、その辺の手法について業者委託になった場合でも、業者任せでなく今までどおり対策本部も作り職員が常駐するので、そこを通して直接オペレータ・業者ということではなくて、それは庁舎事務室としても把握していなければならないことなので当然、中に入ってやってもらうということになるかと思うが、なお、建設事務室にも伝えておきたいと思う。

○ 小野寺一郎委員

結婚への支援および交流を核とした、とあるが、今から30年ぐらい前、婚活を勧める意味で湯殿山スキー場からヘリコプターで朝日村を1周し、スキー場のロッジで月山ワインやオードブルをご馳走して交流を図ったが、1組もまとまらなかった。また今回もこのような計画があるが、ぜひ1組でも2組でもまとまるような形でのイベントの組み方をお願いしたい。

今回は首都圏の女性を対象としているようだが、観光目的にならないような形で進めていただければありがたい。

○ 石井一三総務企画課長

確かに30年ほど前、ヘリコプターで遊覧飛行をさせた。その中で1組か2組、継続して付き合う方がいたものの、なかなか積極性が足りなくて、そのまま成立しなかったという状況があった。

今回も各庁舎でやって、庁舎内の男性というと参加しにくいという声もあり、今回は各地域地域でイベントは持つが参加については特に管内の男性でなければだめだということもないので、例えば他の庁舎で開催する婚活についても積極的に参加できるようにしてもらえたらいいと考えている。

「森の婚活物語」については、担当次長がいるので、内容について補足してもらいたい。

○ 三浦総一郎企画部次長

「森の婚活物語」は、この文書では首都圏の女性を対象にしたとなっているが、首都圏の女性も、であり、女性なら誰でもいいということだ。男性は庄内の人に限るが、女性はどこの方でも結構と、そういう意味で、去年は首都圏の女性だけを対象にしたが、定員に満たないということで急遽地元の女性も募集したということがあったので、今年は女性は住所用件を問わないことにした。

ただ、何のためにやるかとなると、やはり、地元の人との結婚相手を探すためにするわけなので、男女とも誰でもいいというわけにはいかず、基本的には半分は地元の方を対象にということになる。それで今回は、女性は誰でもいいが地元の男性ということにしている。

婚活については、合併する以前からそこそこの町村で30年～20年前、意外と活発にやられていた

歴史があり、鶴岡市でも農業の後継者対策という位置づけで実施していた。やはり当時は、一部成果はあがったものの、総体的に見るとさほど成果が上がらず立ち消えになった。

当時はまだ婚活という言葉がまだ一般的になっていなかったので無理もなかったと思うが、時代が変わって、かなり若い人の間でも婚活自体がさほど抵抗感なく受け入れられているという時代だ。マスコミでもしょっちゅう放送されていて、意外とやれば集まるということもあって、車座ミーティングなどでも必ず話題が出されるということもあり、昨年から全庁的に婚活をやるという位置付けになっている。具体的には今年からは各庁舎最低1回のイベントはやるということで、旧鶴岡市としては森の婚活をやる、朝日庁舎はスノーボードを冬にやる、あるいは温海では夏に海を使ってイベントをやる、こういった形で6つシリーズでお送りする、今年はそういった展開も考えているが、あとはネットワークを作るとか、民間の事業者で婚活イベントを盛んに行なっているが、山形県の中でも特に庄内は積極的にやられており、レストランであるとか結婚式場であるとか、そういうところでやっているイベントに対する支援というものも用意している。この婚活支援事業6団体×30万という予算がそれに当たる。情報の提供や民間への支援、あるいは庁舎市役所自ら企画してやるイベントなど、様々な仕掛けをやっていききたい。

予算規模にしても昨年より増額になっており、これから益々この部分については強化を図っていかねばならないと思っているし、山形県のほうでもこの部分はかなりテコ入れをしている。先日の新聞にも載っていたが、婚活支援ネットワークのシステムを作り直したというような意味の記事があった。県それから庁舎と連携をとりながらこの事業については進めていきたい。

○ 佐藤芳弥会長

担当の次長からいろいろ説明をいただいた。いろんな婚活事業で対応することも大事だが、基本的には鶴岡市がいろいろな事業でいろいろなものが活性化し、若者が自由に生活する状況になればと思う。そういう意味で企画は大事な部分なので、広い意味でこの地域の活性化について企画部長から意見をいただきたい。

○ 秋野友樹企画部長

地域の振興とか定住の話があったが、婚活も含めて朝日地域だけの話ではなくて、市の中心市街地についても非常に過疎化高齢化が進んでいる。そういう面では市全体として魅力のある市をつくっていくためにはどうしたらよいか、婚活のこともそうだし、あるいは雇用の関係もそうだ。全国と同じようなことを同じようにやってもなかなかそうはうまく進展するわけでもないので、幸いここにはいろいろな資源があり、朝日地区は自然の資源では有数の資源を持っている。そういう資源を生かしたり、あるいは私どもでやっている先端研の関係についても世界に誇る研究施設なので、そうところを今後とも生かしながら雇用なり魅力なりのある市を作っていくために今後ともがんばっていききたいと思うので、いろいろなところでご意見をいただければありがたい。

○ 佐藤芳弥会長

いろいろな意見を持っている方あると思うが、この会が最後なので、それぞれに思いを1分ぐらいにまとめて、一言ずつ発言をお願いしたい。

○ 小関祐二委員

ひとつは雪のことだが、去年から始まった除雪機を各地にブロックごとにおいて、パートナーズで弱者の除雪対策をしていった。運用の仕方が決まらないままに各地域で進んでしまって、大変現場がパニック状態になったが、今年は予算もついているみたいで、基本的にはパートナーズなので地域の人が体を提供するのであって、経費その他に関しては、こういうふうに予算を取ってもらいガソリン代などを対応してもらって、お互いが一緒になって地域で大変な思いをしている高齢者の方とか身障者の方とか、助けていく地域づくりをしていけたらと思う。

もうひとつは、自主防災の活動について補助金が2分の1とあるが、前の審議会からずっと言ってきたことは、昨年の3.11の震災からこの鶴岡市は災害防災に対して何を学んだのかという部分で、自主防災を確立する上で整備とか器具とかそういう部分が必要だが、自治会ごとに世帯数が違うので負担率が全然違う。世帯数が少ないところは1戸あたりの個人負担が大きくなってしまいが、器具は同じものがいい。平等の中の不平等でなくて不平等の中の平等という部分で自主防災の支援策を応援していただければと思う。小集落はいざというとき道具がなかったということでは困る。トランシーバは2つあってトランシーバなのに、1つしかなかったでは通じない。

もうひとつは、農林の間伐材の云々という活性化の部分だが、松ヶ岡のクラフト展で、かやぶき屋根をほどいて出た真っ黒くなった竹を靴べらにしたものと、山の中で鳴らす小さい笛を買ってきたが、靴べらが2,500円、小さい笛が1,000円だった。自分たちで作れば丸儲けだと思った。捨てるものが靴べらになっているというところで、間伐材だとかそういうクラフトで六十里越街道を歩いている人たちにぶら下げて売ればいいと思って、これを資金源にしたいが、誰が作るかというところでは、やっぱりシルバーの人達とか、手に覚えのある方々に作ってもらえると地産地消ということですからすすめていける。オリジナルというところを作り上げていく、ひとつの自然の中においてできること、朝日だからこういうことが出来るんだというところを作り上げていく創造の文化というものをつくるべきではないかと思った。

大鳥の集落活性化ビジョンがどのように出来たのかを聞きたいし、これから田麦俣、大網がつくっていくわけだが、どういったビジョンをつくっていくのか。気になっているのは、過疎法は過疎法であるが、過疎法は生活しやすくするのが主だが、便利な生活しやすい支援策でなく、生きられる過疎法の対策を講じてもらいたい。そこで生活できる過疎法で支援をしてもらいたい。生活できなければいくら便利でも出ていくので、定住化していかなければだめだと思う。そのためにも婚活もあるし、婚活をしても、自然には魅力あっても人間には魅力がなかったでは困るので、要は魅力がある若者づくりをするためにはどうしたらいいのか、そこの地域に誇りがある人間をつくらなければだめだと思う。誇りを持つためにはそこに生活がきちんとしていなければだめだということだ。

ルネッサンスというのは、究極は輝く人間像を創っていくわけなので、全て人間が基になる。いかに輝く若者をつくっていくかというところを、これから地域全体が一丸となって協力して取り組んでいくべきものだと思う。みんながあっち向いているような地域でなくみんなが地域のことに人のためにというところが大事だ。究極は思いやりが大事、そのためには松ヶ岡にある西郷隆盛の道義主義国家を学べといっているが、要は思いやりをもって国となす、庄内藩の建設精神にも成り立つ。

○ 松本壽太委員

提言書の地域振興に関する提言1、中山間地域生活環境の維持再生、人材育成および防災体制、現状と課題の中に人口減少による役員のなり手不足、共同作業の労力人手不足、早急な対応が必要であるとか、災害の発生が危惧される、行政が支援を行ないながらも、という防災に対して、人口減少というの

はすべての、何十年來の問題であったわけだが、なぜこう下がっていくか、この提言の回答の中の事業を100%やったとしてもプラスにはならないとイメージがある。現状維持、現状維持と言っても時間がたてば絶対もっと高齢化し、人間も欠けていくというのが現状なので、何か原因というものが明確に判らないのではないかという気がする。普段どんな生活をしているのか、酒を飲んだからとかタバコを吸ったからではないかとか原因があるかと思うが、原因追求というところにきちんとの的が絞られていなくて、その対策をちゃんとしていないから特効薬もなければ手術の効果もないという現実があるのかなという気がする。

この問題は昔から言われ続けてきたことだが、今なおこれを継続してやらなければならない現実があるということで、今までの過疎法ではハード的な部分で使ってきたわけだが、ハードは整備されても人はいなくなってきているというジレンマに陥っているというのが現実なので、非常に歯がゆい問題だと思っているし、回答もないのかなと思っている。

○ 佐藤宥男委員

最近、考え方が変わったことがひとつある。

森とか森林と言うと暗いイメージだったのが、明るいイメージに変わった。工芸家で作家のイナモトさんという方から森と人間という話を聞いたが、それを聞いたら人間は森がないと生きていけないという結論だった。具体的には、酸素はほとんど森が作っている、以前は海水もきれいだったから沿岸部分では酸素を作っていたのが、現在では大部分を木が作っているということだそう。たとえば人間が一人どれだけの空気を吸うかといったら、20キログラム、だいたい体重の三分の一ぐらい。次に呼吸するために、生きるためにどれくらいの木が必要かとなると、15、6本。これは世界中ほとんど変わりが無いそう。15、6本の木がないと生きていけない。生活に関してはかなり違っており、南インドあたりとかブータンあたり生活だと一人当たり4、50本の木があれば生活できる。振り返って日本人はどのくらいかというところ350本から600本の木がないと日本の文化生活には間に合わないそう。ちなみにアメリカの場合は790本から800本。プラス15、6本の木は呼吸するために必要なわけだが、そういうことでとにかく木がなければ生きれない、木がないと海もだめになるそう。よく山に木を植える牡蠣の養殖は、森をきれいにしたために牡蠣がよく養殖したとその原理というのは森で雨水とかが腐葉土を通ってくる時に、フルボ酸鉄というものを含んだミネラル水が海に流れるとそこに植物プランクトンが集まってきてそれを動物プランクトンが食べてというその連鎖で、牡蠣を食べるのも森を食べることだということらしい。つまり、いい水を作るのにも森が必要だということ、いい空気を作るのにも森が必要だと、そういうことを聞いてから森林文化都市の森林ということに非常に好印象を思うようになった。

○ 小野寺一郎委員

私からは、グラウンドゴルフ場のことにこだわってみたい。

以前にもこの会で話題になったが、朝日地域にも是非グラウンドゴルフ場がほしいということで、老人クラブとグラウンドゴルフ愛好会が中心となって署名活動を2回ほどやっている。そして市長にも直接、面談して陳情した。

その後庁舎当局からも検討してもらっているが、そのなかで新しく作ることは出来ない、各地区にある山村広場を再整備する形でやってみてはどうかという提案があった。場所としては手ごろな広さ、駐車場やトイレなどが整備されている本郷の山村広場が適当であるということで、いままで何回も去年だ

けで5回ぐらい検討委員会を開いている。最終的には昨年11月9日、この場所で検討委員会を開いて芝張施工を新年度に行なう予算要求をするということで終わっている。

予算要求は多分したと思うが、その結果、予算はつかなかったの一言で何の説明もなく、関係者にとっては行政への不信感と言うか、もやもやしたものが流れている。

関係者による検討委員会を是非、近々開いてもらって、なぜ予算が通らなかったのか、何処に問題があったのか、どのような形でグラウンドゴルフ場ができるようになるのか、行政側の指導を得たい。

私が言いたいのは、早速老人クラブ・愛好会・地元自治会を含めた検討委員会を開いて、説明も含めた今後の方向を指導、指示していただきたい。

○ 難波一之委員

生活交通確保ということで、高等学校へのバス通学の件に関して補助をもらえるようだ。

私の娘も今年から上の子が高校生になって、2番目の子が障がい者ということで鶴岡の養護学校に通っており、いろいろな補助はいただいている。ただ現状はやっぱりガソリン価格の高騰等があって、補助があってもちょっと厳しい家庭もある。やはりバス通学も年間10何万という定期券の金額がかかるような話も聞いているので、一律という形ではなく現状にあった対応があればありがたい。

PTAでは毎年、地域の庁舎に要望という形でいろいろなことを出しており、対応してもらっているものもあるが、毎年のように「県の方をお願いします」の一言で終わって来る回答もある。毎年同じような要望を挙げても、ただ「要望しています」、「県の方に要望しています」という形で終わっていると、また同じ形になると思うので、明確な回答をお願いしているのであれば、このような回答が来ていますということを教えていただければありがたい。

○ 菅原和則委員

コミュニティ活動と生活文化、地域の伝統芸能活動ということで提言にも載せており、今日の資料3にも婚活と並んでふれているが、なかなか施策として地域における文化の継承というか伝統芸能も含めて以前から表に出てこない。この地域にも芸術文化振興協会があるわけだが、必ずしも地域の芸能団体が全部入っているわけではないので、朝日村の時代から地域における伝統とか文化活動をもう一回掘り起こして何とかネットワークを作ってやってみようという話はしていたが、なかなかそれも出来ずにいる。まして高齢化で子どもたちも少なくなっているなかで、どんどん失われている文化とか、本当に大事に育てていかなければならないものがどんどん切り捨てられているのが現状だと思う。

私は太鼓をしているが、できるだけ和の文化というか、礼儀も含めて子どもたちに教えていこうという形でやっているし、できるだけ地域の中でお祭を通した活性化をしていきたいということで活動しているが、もう一度地域が元気になるためにはやはりそういう文化活動というものを見直しを何らかの形で行なわないと、コミュニティの活性化にもつながらないのだろうと思っている。私たちがこれから考えているのは、朝日全体でどういう形にするかまだ検討段階だが、お祭をやりたいと思う。それから1週間2週間というスパンの中で地域をあげた文化活動を、ほかからもいろんな形で呼んできた地域のみんなが楽しめるような活動もやりたいということは考えている。ただ、なかなか一つ二つの団体でできることではないので、その辺は行政からも積極的にこれから何が必要なのかを踏まえた形で、もう少し積極的に文化面に対する支援をお願いできればと思っている。

○ 菅原孫一委員

朝日村において再生エネルギーを考えたら、家の近くに水が流れているということで、ここでも話しをしたことがあるが、鶴岡市ではどのようなことを考えているのかと、提言書をみたら28ページにいろいろ第5節資源循環型社会の形成ということで書いてある。その中ではゴミの減量をするとか、排出抑制対策をこれから考えるのだろうが、廃棄物の処理施設なども抑制して機能維持するとか、その下に環境に配慮したエネルギーで、うちのほうであれば小規模な水力とか、森林を使ったものとかがいいと思っているが、現在どの辺まで進んできて、小規模水力発電であればどこかでやって実証しているなど、やっているものがあれば教えてほしい。あと、ゴミの排出抑制を進めていくと、リサイクルとか集団回収とか進めていっても、お金がかかれば有料化にしようかと先にはそういう問題もあるのかと考えてみた。

○ 井上時夫委員

産直グーがオープンしてから7、8年経つが、山菜も採ってばかりいるとだんだん細くなってなくなったりもしてきている。去年わさびの苗にも補助をもらって植えたわけだが、そういうものをどんどん増やしていくには支援してもらわないと全額自己資金では大変だ。下木がいっぱい出ているところをきれいにするためにも下の利用を進めていかなければならない。きのこなどに対する補助金をこれからも続けてほしいし、木を大切に育ててほしい。

サル被害のため、山の畑には何を植えてもだめだということですぐ近くにしか植えなくなっている。電気柵を廻してもサルは容易でない。なんとかサルが畑地の中に入らないよう、山から民家に近づかないような手立てを考えてもらいたいと思うし、自分たちも考えていきたい。

○ 帯刀春男委員

そこに住む生きがい、住んで価値があるということの中には仕事以外の楽しみ、文化的な活動も体育的な活動も含めて、地域の中にそういうグループがあるということがとても大事なことだと思う。この地域だけというのは無理かもしれないが、たとえば公的施設が有料になっているので、小さいグループは使えない。何らかのひとつの方向性が決まっているなかでは難しいのかも知れないが、団体を育てるという意味では大事なことで、鶴岡の旧市内のコミセン活動のような活動が出来ればもう少しいろいろな団体ができるような気がするが、有料化したことで団体活動を削いでいる感じにはなっていないのかと思う。女性の団体も含めて集まる場所がないということがこの地域にとってはあるような気がする。そのために無料化ということも非常に難しいが、是非、広い意味で小団体を育てる、またはある意味ではグループの研修会をするとか、活発化するような行政としての何らかの働きかけを要望したい。

○ 佐藤芳弥会長

大滝さんからは、冒頭に小関さんからあった、集落ビジョンに取り組んだ大鳥の状況も含めて報告いただきたい。

○ 大滝清策委員

大鳥はいろいろな問題がある。一つは雪の問題。大鳥自然の家の冬祭りには今年は100人ほど参加しているが、大鳥は2年続けて雪が多くて正月前2回、正月過ぎに8回雪下ろしをしている。排雪するのに3回も機械を入れてもらったが、補助体制についてはありがたい。

除雪の関係は、今現在大鳥には2名配置してもらって、きちんと対応いただいている。

また、タキタロウ村の村長をやっているが、昨年度東北農政局長表彰を受賞した。6月24日、祝賀会を兼ねて山菜祭りを行なうので、ぜひ参加していただきたい。

大鳥地区はいろいろな問題を抱えている。少子化問題・高齢化、すべての問題を抱えている。

その中で集落ビジョンの話があったが、年をとっている方がボケないで健康でやっていけるかということが一番の問題だ。大変なのは高齢者が孤立する可能性があることだ。高齢者宅を1軒1軒回って朝、除雪を行なう予算がついた。それから8月16日の大鳥川フェスタへの送迎バスを出してもらおうとか、そういったものにビジョンとしての予算を上げている。

孫たちが朝日のサッカースポーツ少年団に加入しているが、保育園も小学校も1日も早く統合してもらいたい。小さい小学校から大きい中学校に行くよりも、なるべく保育園から小学校から統合した中で育っていくと、大きいところへ行ったときに順応しやすい。子どもたちの気持ちを考えると私はそのほうがいいと思う。

トンネルについて昨年も発言したが、タキタロウ村民でも松山から来た方がトンネルの手前で帰った方が一人いる。昨年の12月、素晴らしいトンネルが出来たが、残った真ん中のトンネルを早く、早く直してもらいたい。

○ 佐藤照子副会長

新事業の水源の里として水を活用した施策の検討というところに大変、感動を覚えた。是非やってもらいたいと思う。

最近の産直あさひグーは、休日は一日500人の来客がある。レジを通ったお客さんだけで500人なので、相当な人数の方が来ていると思っている。また平日は200人がレジを通っているが、観光目的で内陸方面県外から羽黒の映画村を訪ねてくる人が多い。ツアーを組んで朝日の花の名所を観光したいと見える団体さんもいるが、もっともっと朝日には素晴らしいところ、美しいところがたくさんあると思う。ぜひその湧き水があるのなら、その湧き水も観光の場所にしてもらえたらと思う。

○ 佐藤芳弥会長

それぞれの意見、委員の立場でいろんなご意見ご質問をいただいた。一つ一つに回答は出来ないと思うが、この問題には今、答えておきたいということがあればお願いしたい。

PTAからも老人クラブからも、要求したことに行政が応えてもらいたということがあった。

いろいろな事業展開、地域の活性化を願いたいのが、便利になることでなく、生きていくことに喜びを感じるいろいろな取り組み施策にいかねばならない。ひとつは朝日の山林を含めた資源をどう生かすか、中のコミュニティを文化を通してどう作っていくか、それには防災も含めていろいろな課題があるわけだが、今の現状の中でどうクリアしていくかという総合的な面が大事、そのためにはこういう会も含めて行政と一体となったコミュニティを作っていくかということが、財政も厳しいなかでの方向性ではないかと思う。以前は1日でこの時期は田起こし、田植えをしていたが、今は植える人に田起こしをしている人にいろいろな生き方とか考え方があがるが、目的はおいしい米を作ることで方向は同じだ。これから鶴岡市の行政も、みな鶴岡市に合わせるのではなくて、それぞれの地域性を生かした、違いを乗り越え認め合った生きる喜び、生き方を重点にした方向、すべてのいろいろな事業とか取り組みに欠かせないのではないかと、皆さんの意見を聞きながら感じた。

○ 小関祐二委員

鶴岡市が合併になって旧市町村いろんなところを廻るが、やっぱり今の鶴岡市で一番いいところは朝日地域であると、私は誇りを持ってここで生きている。これが一人ひとり、一番大事な部分だと私は思うので、そこから出発して知恵を出し合っていく、力を出しあっていく、協力し合っていくスタンスが大事。行政も予算がないという部分でパートナーシップがあるが、行政がどうだとか地域の人はどうだとかではなくて、同じ方向を向いて同じ地域の人間として一緒に生きていくというひとつの気持ちの部分での共有感、共同感、共存感とか、これが一番大事だなと思っている。前の朝日村の時代と何が違うかといったら、行政と一体感がないということをいろいろな人から聞く。しかし、組織が変わったからどうだではなく、人間がすべてなので、組織が変わっても行政マンとしての立場にはいるけれどもひとりの人間として変わってもらいたくないというのが私の思いだ。

○ 菅原和則委員

審議会の方向性について、朝日地域を代表して住民の意見をまとめて市にいろんな要求したり問題を提言したり、あるいは市から出されたものに対して住民の意見をまとめて下ろすなり、また要望するなりという機関だと認識していたが、なかなかそういう機能を果たしていないと思っている。第3条のところの2に審議会は必要と認める事項について市長に意見を述べるができるという文言があるので、やはり審議会の中でこれは絶対やらなければならない、はっきりノーといえるような審議会でなければ私は意味がないと思う。審議会のメンバーが替わるので、ぜひそこを念頭に置きながら、諮問機関や追認する機関ではないと、きちんと審議をして話をする機関なんだということを、もう一度お互いに行政もわれわれも含めて認識して対応する必要があるとも思った。

○ 佐藤芳弥会長

すべて審議会、まず私も責任を感じている。委員でない方からも、審議会はこの地域にとっては一番の方向性を出す会議になっているのに何をやっている、とお叱りを何度か受けた。その思いを乗せて公募委員になってほしいと伝えた。

やはり、この審議会のメンバー本当に忙しいなかご苦勞をかけているが、それぞれの立場で意見を言い、同じ課題を共有することがスタートだと思っている。自主的な活動をやりたいということで議会傍聴もやってきた。行政も大事だが、市民が自分たちで「こうしていく」という力も大きくしていかないと、この地域の大きい力になっていけないと思うので、ぜひ次の委員にいろんな思いを反省しながら伝えていきたいと思う。

4. その他

委員改選(任期：H24. 6. 10～H26. 6. 9)、公募委員の募集について

平成 24 年度地域審議会の開催計画について

5. 閉会